

第1回 琵琶湖文化館後継施設基本計画検討懇話会概要

1. 日時： 令和2年11月2日（月）15時00分～17時00分

2. 場所： 大津合同庁舎7-A会議室

3. 出席者

○懇話会委員

高梨会長、大河内委員、太田委員、佐藤委員、對馬委員、藤田委員、福家委員、根立委員、中本委員（欠席者なし）

○津田参与

○県

中嶋部長（冒頭）、村田理事、中嶋次長 文化財保護課：澤本課長、井上主幹
文化財活用推進室：佐野室長、八代室長補佐、和澄主査、田澤主任技師
美の滋賀企画室：棚橋室長
(株)丹青社

4. 主な意見

委員

場所について、私からはどこということはない。瀬田であれば設備のシェアも可能かもしれないし、浜大津であればこれで地域の活性化ということも考えられる。湖岸の場合、水害にあわないよう、十分に対策を検討する必要がある。スケジュール的なことはどうなるのか。

事務局

湖岸の場合、浸水想定以上に床面をかさ上げするとともに、収蔵・展示を2階以上とすることで対応する想定である。
スケジュールについては、標準的なものとして昨年度お示しした、基本計画策定後7年後がベースである。

委員

立地については、湖岸、中でも大津港周辺というのが文化財所有者の総意であり、11月にも滋賀県文化財保護連盟として県に要望したいと考えている。

大津港の場合、商工会議所が進めているアリーナ・コンベンションの計画との整合性はどうか。双方が並び立つのは物理的に難しいのではないかとすると、中途半端な文化館を作るのではなく、効果的な土地利用を考えるべき。大津港は玄関口なので、シンボリックなものとなれば嬉しい。湖岸ということで、日本遺産でもある文化財理解の施設になればいいと思う。アリーナ計画とうまく調整してほしい。

大津市の要望とあるが、大津市もなぎさ公園の活性化を検討しており、歴史文化構想もある。港湾用地を一層よいものとするために、大津市とうまく連携すれば、交流機能の補完ができるのではないかと。大津市との一層の連携を望む。

スケジュールは基本計画を策定してから7年程度かかるということについては、昨年から変わらない部分であるが、一方でコロナの影響は大きく、緊急性についても変わらない。万博が開催される2025年というのは一つの目安となるのではないかと。最も盛り上がるタイミングである。一度だけでも2025年にあわせたタイムスケジュールを検討してほしい。コロナ後の社会の励みにもなる。普通に考えると7年かかるが、枯らしの期間は文化財を入れずにデジタルで対応など、そんなことも可能ではないかと。万博のサテライトという知事の発言もあったが、博物館が間に合うのであればそれが効果的。緊急性、コロナ、万博を考えた上でタイムスケジュール等検討できないか。それが一番の所有者の思いである。

事務局 にごわいの創出という面で単体では難しく、大津市とも話をしている。緊急性、コロナ、万博といった要素がある一方で空気環境を安定させる問題もあるので、デジタル活用等含め様々な検討をしていきたい。

委員 琵琶湖文化館は一刻を争う問題である。しかし、今回の資料は、相変わらず総花的な印象である。どのくらい予算と人員が工面できるのかを示してもらいたい。

事務局 昨年度の課題のうち、今回は立地の案を示した。規模や予算、人員については、2、3回目で示してまいりたい。

委員 限界集落等様々な課題がある中、大きな収蔵庫は必要。また、保存科学の専門家が必要ではないか。館の性格を考えるうえで、人員の話は避けては通れない。

委員 活動の5本の柱はそれぞれすばらしいが、重点化が必要となってくると、私は、収蔵保管、調査研究、地域の文化財の保存・活用支援の3つではないかと思う。どこに重点を置くかによって、ふさわしい立地も変わると思う。集客の面では大津港と思うが、収蔵保管、調査研究、地域の文化財の保存・活用支援という面では瀬田の方がいいのかもしれない。実際に文化財を守る立場の人から話を聞いているか。

事務局 学芸的な立場から言えば、立地によって収蔵保管、調査研究、地域の文化財の保存・活用支援ができる、あるいはできない、ということはない。現文化館も湖上にあるが、立地特性からくる湿度管理の面で苦勞しているわけではない。瀬田でも湖岸でも、特段の欠点はない。

委員 新しい文化館ができて、どの方向に向かいたいのか、だれに対してどのような効果を与えたいのか、重点的な活動は何か、何のために文化財が守られるべきなのか等、新文化館ができるまでの過程や今の状況を見せる形で進めてほしい。

事務局 これまでも、文化館の収蔵品を地域連携企画展という形で活用し、また、「アートにどぼん」や「花湖さんの打出のコツチ」といった取り組みを進めてきた。今後もそういった機運醸成を図り、できるまでの説明をしっかりと行いながら、盛り上げてまいりたい。

委員 随分方向性が見えてきた。以前と違うのは、滋賀県と市とが具体的な協議をしてきているところだと思う。みんなで話し合えば、いろいろな課題が解決できる、というところまでできた。あとはそれぞれがスピード感をもって取り組みができればいい。

滋賀、大津は文化財の宝庫であり、駅を降りたら文化財のまち、というのはいい。その点で大津港がよい。県、市、経済界で具体的なワーキングができればと思う。大津の経済界は万博に向いている。できることなら、まずは万博の2025年に完成が間に合えばと思う。

委員 県立の博物館はたくさんあるが、役割分担をしっかりとしておいた方がよいのではないか。例えば、新文化館は「歴史文化系の中核」ということであるが、戦国はどのように扱うのか、それは安土城考古博物館ではないかなど。

県内の博物館の連携は、実際する上で難しいことも出てくる。寄託を受けるにしても、どこで受けるべきなのかということで、それぞれの博物館の利害も出てきたりするので。地域の博物館との役割分担も必要となってくる。

新文化館のキャッチフレーズであるが、「ひらく」というワードもいいが、「つくる」というワードも必要ではないか。古い文化から新しい文化を生み出すようなイメージ。長浜の黒壁がまさにそうである。

(仮称) 新・琵琶湖文化館という名称がどこまで定まっているのかわからないが、「琵琶湖」を入れた方がいいのか悪いのか。琵琶湖博物館と名称やイメージが重なってしまう。近江の文化を伝える、という視点で、名称も刷新した方が良いのではないか。

事務局

連携や役割分担については課題であり、安土城考古博物館や埋蔵文化財センターなど、他の展示施設とも整理をする必要がある。

キャッチフレーズについて、新しい文化を生み出すもの、という思いは同じ。ここでの「ひらく」は「つくる」に近いイメージ。具体的なワードについては検討したい。

(仮称) 新・琵琶湖文化館の名称は、まったくの仮称。新しい施設を前向きに考えるためにそうしている。

委員

新文化館の施設像として、「地域の文化財のサポートセンター」という要素を明文化していることはものすごく素晴らしく、極めて重要なこと。地域で文化財を守ることに苦勞している方に対し、気軽にフォローができる、収蔵保管も含めたサポートができるということが示されている。これが大事なこと。これまでも、学芸員の専門性を生かしてそのような活動をしている館はあったが、明文化はされておらず、業務としての位置づけがあいまいであった。これを明文化するのは日本中で琵琶湖文化館だけではないか。滋賀県としての姿勢、施設の使命として明確に示されている。これまでの文化館の活動を踏まえたものであるが、それが素晴らしい。それを5本の活動の柱に繋いでいくような書き方をしてほしい。

地域で文化財をぎりぎり守っている人をフォロー・サポートするには、学芸員の専門性を生かすことが何より重要。学芸員の重要度が表に見えやすいのが展示である。琵琶湖文化館は閉館前に年間15本とかやっていた。こんなに数をこなしている館はない。これだけの展覧会や、今回提示されている素晴らしい活動の柱を実現するためには、かなりの学芸員の配置がないと絵に描いた餅になってしまう。どのような体制というのは次回以降だと思うが、ぜひ体制の充実をお願いしたい。

活動の核である、収蔵部門については、全国どこの博物館にも余裕がない。どこの博物館もあと何年もつか、日々、収蔵品を詰めて再配置するようなことをしている。そのようなことから、展示施設との兼ね合いはあるが、できるだけ収蔵庫を広くとる必要がある。一方で、展示室はやり方次第でうまく回せばそれほど広くなくてもよい。それよりも、収蔵庫が広いということは何よりも強みになる。立地に関してはその点も合わせて検討する必要がある。

新文化館は、かつての文化館と同じように、実物中心の展示になるのか、それとも歴史系の常設展示があって企画展示室が加わるような形になるのか、考え方があれば教えていただきたい。

場所の問題についていずれにも強みがあって悩むところではあるが、浸水想定については、川崎市市民ミュージアムの水没のような例があるので、どのようなリスクがあり、どのような対策をとるかしっかり説明をされる方が良い。

事務局

床面を浸水最大想定時の水面よりかさ上げすることに加え、文化財の収蔵展示は2階以上とすることで対応したい。

会長 次回くらいに、人員配置を大まかに示してもらうことは可能か。学芸の人数を増やさずに活動を増やすと展示会も回せなくなり、地域の文化財のサポートセンターの役割も弱くなる。建物の規模等も含めた、たたき台等があれば議論が進むと思うが。

事務局 現時点で人員配置の具体的な数字を出すのはなかなか難しい。県政全体の人と金の中で見ないといけない。その要求のためには、こういう施設にしていく、そうすればこういう効果がある、そのためにこれだけの人と金が必要、ということの説明していく必要があり、そのうえで県政全体をみて判断されるものである。立地が決まり、施設が決まり、そのうえで人が決まるということになる。もちろん、内部的には検討を進めており、委員の皆さんの意見を踏まえながら、体制をイメージしていただけるような資料をお出ししたい。

委員 運営形態はどうなるのか。

事務局 施設を作る場合、PFI の検討をしなければならないことになっている。ただし、単に民間に任せるだけということではなく、学芸部門の直営など、様々な運営形態について検討する。

委員 PFI の検討にどれだけ時間がかかるのか。PFI が博物館施設に有用なのかどうか、委員の方が実例を御存じであれば教えてほしい。

会長 PFI について、事務局で、実例、本音の部分について調べていただけないか。国宝・重文を扱う施設であり、ちゃんとした施設を建て、運営をしないといけない。次回実例等調べてお示しいただければ。

委員 早い段階から市や関係者と情報共有をすれば、イメージが共有できる。文化館について譲れない部分もしっかり言うべき。

文化館について、その必要性や、新しいものにしていくということについて少しずつ知ってきていただいている。もっと知っていただけると、クラウドファンディング等、市民にも関わっていただくことにもつながる。今日のこの場もそのきっかけとなる。

委員 立地について、電車の駅からの近さというのは大きな魅力。博物館は、建てるよりも運営・維持する方が大変。来場者の確保の面、どれだけ収入を得られるかということは非常に大きい。県内の文化財のビジターセンターということを考えても、やはり電車の利便はとても必要。

会長 この意見は、自分自身の経験から言っても大切だと思う。経営面を考える必要がある。

委員 今回は個別意見聴取ということであったが、結果をなるべく早くフィードバックしてほしい。

会長 本来集まるのがいいと思うが、事務局で考えていただき、個別ヒアリングということであれば、わかりやすくフィードバックしてほしい。それでさらに意見が出ることもあると思うので。